目次

はしがき
凡例

古代（一）——奈良時代まで——

第一表　年表……一
第二表　系統表……五
一　文学史以前……六
二　文学史の発足……六
三　説話文学……八
四　祝詞・宣命……一三
五　漢詩文……一四
六　歌謡・和歌……一六
第三表　歌謡・和歌1……二三
第四表　歌謡・和歌2……二三
第五表　歌謡・和歌3……二五
作品一　説話文学……二六
作品二　祝詞・宣命……二七
作品三　漢詩文……二九
作品四　歌謡・和歌……二九

古代（二）——平安時代——

第一表　年表……三八

第二表　系統表……四六
一　漢詩文……四七
二　和歌……四九
第三表　勅撰和歌集……五九
三　歌謡……六〇
四　物語……六三
第四表　源氏物語……七三
五　日記……七九
六　随筆……八二
七　歴史物語……八三
八　説話文学……八五
作品一　漢詩文……八七
作品二　和歌……八七
作品三　歌謡……九三
作品四　物語……九三
作品五　日記……九六
作品六　随筆……九八
作品七　歴史物語……九九
作品八　説話文学……一〇〇

中世——鎌倉室町時代——

第一表　年表……一〇一
第二表　系統表……一一三

一 和歌……一三三
第三表 勅撰和歌集……一三四
第四表 和歌三家の伝統と勅撰集……一三七
二 連歌……一三八
三 歌謡……一三一
四 漢詩文……一三三
五 物語・日記・紀行……一三四
六 随筆……一三八
七 歴史物語……一四一
八 説話文学……一四三
九 戦記文学……一四五
一〇 謡曲・狂言……一四九
第五表 謡曲……一五三
作品一 和歌……一五三
作品二 連歌……一五八
作品三 歌謡……一五九
作品四 漢詩文……一六〇
作品五 物語・日記・紀行……一六一
作品六 随筆……一六三
作品七 歴史物語……一六四
作品八 説話文学……一六四
作品九 戦記文学……一六五
作品一〇 謡曲・狂言……一六八

近世 ——江戸時代——

第一表 年表……一七〇
第二表 系統表……一九〇
一 和歌・狂歌……一九一
第三表 和歌の展開……二〇三
二 漢詩文……二〇四
三 歌謡……二〇八
四 俳諧・川柳……二一〇
第四表 俳諧の展開……二三八
五 小説……二三九
第五表 小説の展開……二五三
六 浄瑠璃……二五四
七 歌舞伎の脚本……二六七
作品一 和歌・狂歌……二七五
作品二 漢詩文……二七九
作品三 歌謡……二八〇
作品四 俳諧・川柳……二八〇
作品五 小説……二八六
作品六 浄瑠璃……二九三
作品七 歌舞伎の脚本……二九六

近代 ——明治大正時代——

第一表 年表……三〇〇

第二表　系統表……三三
一　短歌……三四
二　俳句……三三
三　詩……三三
四　小説……三四
(1)　明治の小説――自然主義文学まで……三四
(2)　大正の小説――反自然主義文学以後……三七
五　戯曲……四〇
作品一　短歌……四六
作品二　俳句……四九
作品三　詩……四一
作品四　小説……四三
作品五　戯曲……四四
作家・作品　解説索引……四六

第一表　年表　古代(一)――奈良時代まで――

紀(日本)西(年号)	天皇	和歌・歌謡	祝詞・宣命	説話文学	漢詩文	時代	外国文学
五九二	推古				九五『伊予道後温泉碑文』	九二聖徳太子摂政	
六〇〇					〇四『憲法十七条』 〇七『法隆寺薬師像光背銘』 一五以前『三経義疏』	九六法隆寺 〇三小墾田宮 〇七小野妹子遣隋	
六五〇	孝徳(大化)四五					三〇飛鳥岡本宮 四三小墾田宮 四三飛鳥板蓋宮 四五長柄豊崎宮 四五蝦夷父子亡ぶ 四五大化改新 四九冠位十二階制定	四八孔穎達
	舒明	三聖徳太子(五七四―)	三〇『天皇記国記臣連伴造国造百八十部并公民等本記』		三聖徳太子(五七四―)		
	皇極四三	舒明天皇(五九三―)四一					

古代 (一) —奈良時代まで—

一　文学史以前

日本文学の歴史は、およそ聖徳太子(五七四―六二二)の時代(五九三―摂政)から始まり、それ以前は文学史以前と考えるほかはない。

この時代、日本民族は大陸と交渉を持ち、漢字・漢文も入って来た。漢字や漢籍がわが国にはじめて伝わった時代は確かでないが、文学史以前であり、漢字を使い、漢籍を読んだのも、帰化人か一部の貴族かに限られていたであろう。

文学史以前の文学的産物

一方、わが国固有の文字の存在は確かめられないから、文学史以前の文学的産物は、説話・歌謡・祭詞・詔勅など、主として口誦によったはずである。説話はおそらく、一般民衆・諸氏族・古老などによって伝えられ、歌謡はこれらの説話の中で語られるか、歌垣その他、農村・山村・漁村などの諸行事で民謡風に歌われるかしたものと思われ、祭詞・詔勅なども祭神・民衆の前で奏上・宣布されたものと想像される。

作家　一　八頁。

その他の事項　二　「かがひ」ともいう。山や海岸などに男女が集まって歌をよみかわし、結婚の機会にもなった古代の習俗。

二　文学史の発足

皇室の祖先に当たる豪族が他の豪族を帰服させ、大和地方を中心にして、次第に統一的な国家を形成したのは五世紀の頃といわれる。

聖徳太子の時代

一方、大陸からは漢字・漢文をはじめ各種の文化が輸入され、固有文化に影響するところが大きかったと思われる。大陸文化導入の傾向を代表した聖徳太子の時代から、氏族制度を改め、中国にならって天皇中心の律令制国家を形成しようとする努力が続けられ、それは大化の改新(六四五)大宝律令(七〇一)などに具体化した。

日本文学の歴史も、ほぼ聖徳太子の時代から始まると言ってさしつかえない。この時代は芸術史上、最初の隆盛期であって、建築に法隆寺の中門・金堂・五重の塔、絵画に同寺金堂の壁画、彫刻に同じく釈迦三尊が成り、千三百年後の今日に古代文化の粋を誇っているが、文学史にもいくつかの注目すべき出来事を確かめることができる。すなわち『伊予道後温泉碑文』(五九五)『法隆寺薬師像光背銘』(六〇七)その他の銘文の製作、『天皇記』『国記』『臣連伴造国造百八十部并公民等本記』(六二〇)の編著、『十七条憲法』(六〇四)『三経義疏』(六三〇以前)の著作などである。銘文は、漢字によって国語を表現しようとした試みを示す最古の資料であり、『天皇記』などは焼失して伝わらないが、日本の歴史書の編著の初めであったことは推定できる。ことに『十七条憲法』と『三経義疏』は、太子の執筆または指導に成ると思われる。前者は官吏の道を論じ、後者は経典を解釈したものであって、純粋な文学ではないが、前者の的確な表現、後者の創意に富んだ独自の理解などは、広い意味の文学に関係している。

十七条憲法
三経義疏

これらの製作が歴史的に確かめられること、『天皇記』などの記録を除けば、他のすべてが今日残っていることは何よりも注意すべきであって、わが文学はここに明らかに一線を画して伝説時代から歴史時代に入ったものと見なすべきであろう。